

第 30 回新潟周産母子研究会

日 時 平成 30 年 7 月 28 日 (土)
午後 1 時 30 分～
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館 2 階

I. 一 般 演 題

1 NICU 入院児支援コーディネーターとしての取り組み

新保亜希子・渡辺ひとみ*

新潟大学医歯学総合病院
NICU 入院児支援センター
同 NICU・GCU*

NICU・GCU に長期入院している児について、その状態に応じた望ましい療養・療育環境への円滑な移行を図ることを目的に、平成 23 年に「NICU 入院児支援事業」が県より当院へ委託され、その一環として NICU 入院児支援コーディネーターが配置された。主な活動は当院における NICU 入院児の個別の入退院支援、新潟県内の入退院支援活動である。

2 当院における低体温療法の受け入れから導入までの振り返り

長谷川千絵・前田恵美子

新潟市民病院総合周産期母子医療センター
新生児内科 看護部

新生児低酸素性虚血性脳症に対する、低体温療法は出生から 6 時間以内の開始が適応である。そのため緊急性が高く、敏速な準備・導入が要求される。

しかし当院では年間症例数が 1～6 例のため、看護師の経験不足、夜間入院ではマンパワー不足から、入院受け入れに不安を感じていた。今回、2013 年度から 5 年間の 16 症例の振り返りとスタッフのアンケート結果から、搬送から導入までの課題が明らかになったため報告する。

3 早産児を育てる母親の NICU 退院後の不安

羽深 朱実・中村 直美・丸山智恵美

上野 直美・北村 千章*・飯吉 令枝*

県立中央病院 東 7 病棟
県立看護大学*

早産児への出生直後からの長期的支援や、退院後早期の介入が重要視されている。本研究では、在胎週数 34 週以下で出生し、NICU 退院後半年前後経過した子どもの母親に対して、成長発達、育児の不安についてのインタビューを行い、母親の不安や困りごとを明らかにした。結果、子どもの身体の成長、発達についての不安は継続していること、授乳や病気に対する不安、育児不安、地域の子育て支援の利用方法がわからないということが明らかになった。

4 思春期および青年期を対象とした妊孕性に関する看護の文献研究

岡部 伶香・有森 直子*

国立成育医療研究センター
新潟大学医学部保健学科*

【目的】思春期および青年期にある対象への妊孕性に関して現在行われている看護と今後看護職に求められる役割を文献検討で明らかにする。

【方法】医中誌 web にて「(妊孕性 or 不妊) and (思春期 or 青年期 or AYA 世代) and 看護」の検索式を用いた。

【結果】①対象文献は、疾患有りと無しがほぼ同数であった。②現在行われている看護は、教育と相談が大半を占めていた。③今後求められる役割は、教育が最も多かった。

5 ヘパリン添加の有無と末梢静脈挿入式中心静脈用カテーテルの閉塞率の比較

鈴木 亮・倉辻 言

県立中央病院小児科

末梢穿刺中心静脈カテーテルは、閉塞予防にヘパリン添加が有効であるとされている。一方、ヘパリン添加を中止してもカテーテルの閉塞率が増加しないという報告がある。当科では、2015 年

9月から血栓形成予防効果のある合成高分子でコーティングされたカテーテルを導入した。2017年10月から輸液中へのヘパリン添加を中止した。コーティングの有無、ヘパリン添加の有無によるカテーテルの閉塞率を比較検討した。

6 当院でGH治療を施行したSGA性低身長についての検討

山崎 肇・永山 善久・大石 昌典
佐藤 尚・臼田 東平・阿部 忠朗
新潟市民病院総合周産期母子医療センター
新生児内科

対象は20名(2002年2月～2014年9月出生、男13名、女7名、NICU入院歴あり13名、なし7名)のSGA (small for gestational age) 性低身長児である。NICU非入院の7名は正期産SGAであり、6名は出生時に診断されなかった。多くは安全にGH (growth hormone) 治療が施行され、成長率も改善したが、NICU入院例では神経学的予後が懸念される症例が多かった。

7 早産期における胎内発育遅延の発達への影響

林 雅子・桑原 春洋・楡井 淳
星名 潤・庄司 圭介・金子 孝之
新潟大学医歯学総合病院
総合周産期母子医療センター

【目的】子宮内発育遅延の発達への影響について検討。

【方法】35週以下で出生した児に、修正18ヶ月、36ヶ月、にBayley IIIを施行し、SGA群、非SGA群で比較した。

【対象】修正18ヶ月122名、修正36ヶ月80名。

【結果】認知、運動、社会情動、適応行動では有意差を認めなかった。言語スコアでは18ヶ月で有意差はなかったが、36ヶ月ではSGA群で有意に低値であった。

【結論】子宮内発育遅延の影響も考慮した経時的な発達の評価が必要である。

8 新潟県における2017-2018シーズンRSV感染症入院数調査

臼田 東平¹⁾・岡部 忠朗¹⁾・山崎 肇¹⁾
佐藤 尚¹⁾・大石 昌典¹⁾・永山 善久¹⁾
榊原 清一²⁾、松永 雅道²⁾・田中 岳³⁾
小林 玲⁴⁾・沼田 修⁴⁾・竹内 一夫⁵⁾
倉辻 言⁶⁾・和田 雅樹⁷⁾

新潟市民病院総合周産期母子医療センター
新生児内科¹⁾
新発田病院小児科²⁾
済生会新潟第二病院小児科³⁾
長岡赤十字病院小児科⁴⁾
長岡中央総合病院小児科⁵⁾
県立中央病院小児科⁶⁾
魚沼基幹病院小児科⁷⁾

RSウイルス感染症は、乳幼児の最も頻度の高い呼吸器感染症であり、重症化しやすいハイリスク児にはモノクローナル抗体のパリビズマブによる予防が流行期に行われている。従来は冬期とされていた流行期が近年早まっていることが報告され、パリビズマブ投与期間と流行期にずれが生じている。新潟県における2017-2018シーズンのRSV感染症流行状況や入院数について調査した。

9 胎児MRIにて腸捻転を指摘された胎便性腹膜炎の1例

合田 陽祐・奥山 直樹*・村田 大樹*
倉辻 言**

県立中央病院研修医
同 小児外科*
同 小児科**

症例は0生日女児。在胎35週6日に健診時のエコーで軀幹断面積の増大が認められ当院産婦人科へ母体搬送となった。胎児MRIで多量の腹水、腸管拡張、腸捻転を指摘され、胎便性腹膜炎と診断された。翌日緊急帝王切開により出生、BW 3698gであった。同日、捻転解除、壊死腸管の切除、ストーマ造設術を施行した。術後5日目から経口哺乳を開始し、術後42日目でストーマ閉鎖術を施行し、術後110日目で退院とした。